愛知工業大学研究報告
第４０号　平成１７年

ものづくり文化と倫理

Creating Culture and Ethics

森　　豪†

Tsuyoshi　MORI

Abstract This paper deals with creating culture and ethics. Mr. Sadayoshi Terukawa, who has suffered from ALS, published a book about his life under medical treatment. His words of the book, "I have lived because I am a human being," attracted my attention. When the words caught my eyes, the World Expo has been prepared. The theme of the Expo is "Nature's Wisdom" which means we have to solve the environmental problems and protect the natural world. The environmental problems have bee caused by human beings. It is human beings that destroy the environment and are to be blamed. But Mr. Terukawa says it is human beings that protect him and give him a life. His life under medical treatment shows that human beings are fragile and cannot live without mutual cooperation and techniques for invention to make their livings. Westerners' way of thought is to divide nature and human beings or culture. But that way of thought which Japanese followed and resulted in the modern situation in which the natural world had been destroyed and environmental problems had been caused. Now is the time that we have to change the way of thought. We can find the true way in the world of interactive exchange between nature and human beings which is shown in the words of Mr. Terukawa 's books.

１．はじめに

岩波書店の「図書」（２００４年２月号）に「著者からのメッセージ」という欄があり、「私は人間だからこうして生きている」と題する、次のような文章が掲載されていた。

> 本家の由美ちゃんが蝶々の羽化を見せてくれた。超ミニのラグビーボールのような蛹を二つ架台の上に載せたので、じっと見ていたら殻を破って出てきた。生命の誕生である。はじめのは元気よく飛んだ。次のは飛んだが、三メートルくらい先の地面に降りてしまった。「あの蝶は羽に障害があるから終わりだね。飛べなければ生きていけない。自然は厳しいよ」の解説。
>
> 蝶々でなくてよかった。神経難病ＡＬＳに罹って手足が動かなくなり、呼吸器をつけて声が出せなくなっても、私は人間だからこうして生きている。その私が皆さんの助けを借りて本の出版をすることになった。
>
> 病気だって楽しいこともある。面白かったら笑い、心に残るところがあったら読み返してもらう、そんな本であってほしいと願っている。（ｐ.32）

これは『泣いて暮らすのも一生　笑って暮らすのも一生』の著者照川貞喜氏の言葉である。筆者の目に留まったのは、「私は人間だからこうして生きている」という題字である。時は、折りしも、日本万国博覧会、通称愛知万博の開催を控えていた。この万博は環境万博とも言われ、環境問題が中心テーマであった。環境問題を考える時、人間存在は悪であると見なす傾向の論説が多く、「人間がいるから、人間だから、生きていけない」と言えるような雰囲気があった。少なくとも、筆者の気分は、そのようなものであった。科学技術の成果が疑われ、人

†基礎教育センター　総合教育教室

間の生産活動に疑問符が打たれているような感じがしていたのである。そのような気分の時に目に入った「人間だから生きている」という言葉は、鮮烈な印象を筆者に与えた。この言葉について思いをはせている間に、この言葉が、人間のあり方の原点を述べているように思われてきた。本稿は、その思いをもとに、ものづくりと倫理について考察したものである。

２．人間はひとりではない

照川氏は、昭和１５年に生まれで、１９８９年１２月に神経難病ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）を発病した。１９９１年１２月３０日、呼吸困難となり、１９９２年４月３日、気管切開をして人工呼吸器をつけた。声を失い、手足が動かなくなり、１９９６年には、食べ物も、お茶さえも喉を通らなくなった。本書を書いた２００３年では、どこも動かず、わずかに動く頬にセンサースイッチを貼り付けて、障害者用の意志伝達装置（パソコン）「伝の心」を操作して、意志を伝え、著述もしている状態である。

このような状態の中で、照川氏のモットーは、「病とみちづれ」ということであり、「体が不自由でも、心は自由」ということである。そして著書の書名となった、「泣いて暮らすのも一生、笑って暮らすのも一生、それならば笑って暮らした方が楽しいや」と思って暮らしている。

生き方の指針として強く訴えかけるものがあり、そこにこの著書の最大の価値を見出す読み方が当然できるわけであるが、筆者は、ここに人間の原初的な姿が見出されるように思った。自分の身体がまったく自由にならず、呼吸さえ、呼吸器でやっとできている状態である。それは、弱い人間そのものである。原初、人間は弱い存在であった。身体能力が劣り、獣から逃げまわっていたのである。それは、本家の由美ちゃんが見せた「蝶々の羽化」の状態である。弱い存在は、障害のある蝶々が飛び立てなかったように死ぬしかない。「自然は厳しい」のである。蝶々は、今も原初そのままの状態を生きている。しかし人間は違った。「人間だから生きてきた」のである。

では、なぜ人間だから生きていけるのであろうか。照川氏は、周囲の人に支えられて生きているのは、明らかである。照川氏が、ひとりきりであったら、生きていない。障害のある蝶のように、死んでいた。人間は、人と人の間にある存在である。それでなければ、人間ではない。「ひとりじゃない」という言葉は、孤独な人に「ひとりじゃないよ」と語りかけ、元気づける意味が強いであろうが、環境万博を迎える現在、「ひとりじゃない」ということは、もう一つの意味をもっている。

高度に科学技術の発達した現在、ひとりの人間は、すさまじい破壊力をもつようになっている。環境破壊である。生きているのは、「ひとりじゃない」から、他の人のことも考えなければならない。共生の思想である。その共生は、人間同士ばかりでなく、自然や地球や宇宙との共生である。環境とは、人間を取り囲むすべてのものであり、その環境を大切にし、それとの共生が求められている。

共生ということ、それは、「ひとりではない」ということである。互いを尊重し、その生命を尊重しなければいけない。自分だけの利益をはかってはいけない。共に生きていることを確認しあうことが必要である。環境問題の解決は、この「ひとりではない」という考え方に土台をおくことによって得られる。自分の企業だけが生き延びればいいのではない。自分の国だけではない。国だけではなく、地球が生き延びる。宇宙が生き延びる。その視点が、地球的、宇宙的視点をもつことである。

現代、人間は環境を脅かす存在となり、「ひとりじゃない」から環境を大切にしなさいと言われるまでの存在になった。しかし人間存在の原初状態を考える時、「ひとりじゃない」のもつ意味は異なった。人間は、「ひとりでは生きていけない」、弱い、危うい存在であった。集団になって、共同して、協力して、初めて生きていける存在であった。集団になれば、習慣ができ、規律ができ、法律ができる。その基準は、集団の維持であった。集団の生存を脅かす存在は、許されなかったのである。倫理、道徳は、集団の中で成立し、集団の生存・維持のためである。それは、現在でも、一貫している。環境破壊を禁じる思想は、究極的には、人間の生存のためである。

３．倫理と常識と想像力

集団の規律を生むものは、何か。集団のもつ判断力を形作るものは何か。それは、「常識」というものである。それは、集団の習俗・習慣であった。常識は、集団で育まれたものである。集団の常識であるゆえに、それは揺らいでいる。絶対的なものではない。時と場所と集団により、異なる場合がある。習俗・習慣は、その集団の人間のあいだで育まれ、伝達されてきたものである。

『倫理用語集』によれば、「倫理 ethics」は次のように説明されている。

社会や共同体などの中で通用している規律やルー

ルのこと。「倫」はなかま、「理」は道理、道筋のことであるから、「倫理」は社会の中でしたがうべき道理、規範、理法のことである。そこから人間としての生きるべき道、人間に値する生き方をあらわす。英語のethicsも習俗や習慣ということばに由来し、社会の習慣の積み重ねから生まれた集団のルールという意味をもつ。「人」という文字が２人のささえあう姿をあらわすように、人間はつねに社会の中で他者と協力しながら生きている。だから人としての生き方を考えることは、社会の人びととのつながりの中でどのように生きるのか、つまり倫理を考えることにつながる。（p.43）

「道徳 moral」については、以下のように説明されている。

人間として守るべき行動の規範、ルールを身につけること。「道」は人間として歩むべき道筋であり、「徳」は「得」という字に通じ、その道筋を身につけ、体得することである。英語の moral（道徳）も ethics(倫理)と同じように習俗や習慣という言葉に由来し、習慣の中から生まれた社会規範という意味をもつ。だから、広い意味においては道徳は倫理と同じであるが、倫理が社会や共同体の理法をあらわすのに対して、道徳はその理法を身につける主体的な態度をあらわす。（p.43）

人間が集団で生きる間に、習俗・習慣が生じ、そこから社会規範としての倫理・道徳が生じた。それは、「常識」とも密接な関係にある。「常識 common sense」は、『倫理用語集』では、次のように説明されている。

ある社会や時代の中で、多くの人びとが共通にもっている意見や判断のこと。学問的な根拠を問われることはなく、時代や社会の変化とともにかわっていくことが多い。常識は人びとの永年の経験の積み重ねから生まれた智恵であり、人生や社会を安定させる働きをもつと同時に、過去の伝統や秩序に人びとをしたがわせ、進歩的な考えを抑制することがある。常識の中に含まれた健全さを尊重しながらも、常識の中に埋没せず、理性にしたがって常識に疑いのまなざしをむける批判的な精神をもつことが大切である。（p.43）

この「常識」の説明は、われわれが、今日、一般的にもっている考えである。
「常識」の原初の意味について、『倫理思想辞典』で説明されており、「常識」は、明治末に定着した、ラテン語の“sensus communis”、英語の“ common sense”等の訳語である。「もともと個体内の触覚、嗅覚、味覚、聴覚、視覚の五感（五官、五根、五肉）を統合する共通感覚を意味した」とされ、次のように説明されている。

個体内の共通感覚は、共同体の共通の智恵を個体内部に局在、析出させたものとも考えられるが、逆に個体内の共通感覚が、社会関係のなかに投射されていった過程とも考えられる。生産・流通・消費に基づくヨーロッパ近代の諸社会関係の拡大は決定的であって、その過程において sensus communis が、特定の共同体内部で広く承認されている見解や感じ方、今日の意味での「常識」を指すようになった。（p.143）

中村雄二郎氏『共通感覚論』によれば、「共通感覚」の社会の人々に共通（コモン）する判断力（センス）という意味は、イギリス１８世紀に一般化され、もう一方の、五感に共通するばかりでなく、五感を統合する働きをもつ、共通感覚はアリストテレスまで遡る。アリストテレスの共通感覚について、中村氏は、さらに次のように説明する。

アリストテレスでは、共通感覚は、異なった個別感覚の間の識別や比較の感覚作用そのものを感じうるだけでなく、いかなる個別感覚によっても捉ええない運動、静止、形、大きさ、数、一（統一）などを知覚することができるとされている。さらにすすんで、共通感覚は感性と理性とを結びつけるものとしても捉えられている。（p.9）

そして「共通感覚」は、「想像力」とも関係している。彼の『感性の覚醒』における説明（p.73）によれば、「心象（イメージ）」は、感覚が受け取った印象が感覚の根底にある共通感覚にまで働きかけ、その働きの結果生じた「変化」が、感覚作用の終わったのちまで残るとき、心象となる。このように心象を生み出すことが、「想像」である。印象の持続ということで、対象の働きかけは直ではなく、間接的であり、対象の強制力を免れた自由な立場なので、自由に働き、想像力は創造的になる。
想像力について内田信子氏が『想像力　創造の泉をさぐる』で次のように述べている。

第一に、人は誰でも想像力をもち、想像力によって、世界を個々バラバラな印象や知識のよせあつめではなく、一つにまとまった整合性のあるものとしてとら

えようとする存在であること。

第二に、想像力は人の気持ちを思いやるような身近なことから、地球環境の予測、科学的発見にいたるまで、人間のあらゆるレベルの活動に関与するものであること。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第三に、今後私たちが、新しい文化や思想を生み出し、自然と共生できるような生き方を探るためにも、創造的想像力を発揮することが求められていること。（p.7）

内田氏は、想像力が「整合性あるものとして」世界をとらえることを述べ、「思いやり」や「地球環境の予測」そして「自然との共生」などに想像力が重要な働きをすると述べている。また次のようにも想像力について述べている。

意識が現実を越えるときに、想像力の発現を最もはっきりととらえることができる。しかしそれだけではなく、この現実を認識するときにも、やはり想像的なものが含まれるのである。

私たちが見ているものは現実そのものの存在とはいえず、目の前のものを手がかりにして、以前に実現された行動や態度を再生したり、以前の行動に伴う印象の痕跡を再現させ、それらと関係づけてみているのである。（p.19）

感覚作用が終わっても共通感覚の奥底に残った印象が心象として浮かぶ。目の前の対象の知覚でも、そこに過去の残像が重ねられ、目の前の対象もそのままの対象とは言えず、想像力の変形を受けている。また共通感覚の奥底で受け止められるときにも、印象は統合されているので、なんらかの変化が生じている。それは変化というよりも、感覚作用とはそういうものであって、「そのままの知覚」というものは、ありえないと言ったほうがいいのかもしれない。

人間集団の習慣や習俗が倫理や道徳となり、習慣や習俗を生み出す人間の判断の基礎に常識があり、常識はコモン・センスというもので、アリストテレスまで遡ることができ、想像力もコモン・センスを根底にしているということなのである。

ここで、照川氏の「ひとりじゃない」ということに戻って考えてみたい。人間はひとりで生きる存在ではなく、助け合う存在であるから、生きていけるということと共にあるのが、他者への理解である。他者との関係を理解する能力である。目に見えるものだけでなく、目に見えないもの、他者のこころを読み取る能力が求められる。その能力が、想像力である。想像力は、見えないものを推測することができる能力であり、相手の思いを推測することができる能力である。倫理の根本を構成する能力である。

そして想像力は、自分を超えて働く能力であり、照川氏の「体は不自由でも、心は自由」という考え方を可能にする。自分の状況を、環境を越えて、自在に思いを広げることができる。現状に満足せず、生き延びるために、人間はさまざまに工夫をする。人間には、環境に縛られない自由がある。人間は、生き延びるために技術を工夫した。衣食住で工夫した。生き延びるために開発した。それは、人間らしくなることでもあった。技術は、人間を人間らしくするためのものであった。

自然を前にして、自然の脅威に対して、人間は工夫をして、生き延びていく。その果てに今日の世界がある。愛知万博のテーマは、「自然の叡智」であるが、誘致のために博覧会国際事務局調査団が調査に来たとき、次のような記事が掲載されていた。

実務協議で議論になったのはテーマで、テーマにうたわれた「Nature's Wisdom（自然の叡智）」という言葉は自然と人間が対立する二元論の欧米人にとって違和感があったようだが、かつて日本で営まれていた里山文化の復活が新たな開発の形態になるという日本側の説明に「刺激的で挑戦的なテーマ設定。万博は新たな意義を見いだすかもしれない」（議長）と理解を示した。（中日新聞 1997年11月20日）

「自然の叡智」を当初ヨーロッパの博覧会事務局の人は理解できなかった。まだまだ開発の必要な地域があるという考え方があったらしい。まだ野蛮な世界に苦しんでいる人がいるという見方をした人にとって、自然は野蛮であった。そこに、叡智はない。その一方、「自然の叡智」を疑わない人々がいる。

4．自然の叡智

「自然の叡智」という考え方は、西欧にあった。その始原は古代ギリシアである。大島一彦氏の『ジェイン・オースティン』には、１８世紀のイギリス思潮を述べた次のような言葉がある。

ロマン派の時代は感情の時代であった。面白いのは、どちらの時代も自然を称え、自然に従えと命ずるのだが、古典派の時代には、例えばポウプの『人間論』に典型的に見られる如く、自然とは理性であり秩序であ

り法則であったのが、ロマン派の時代になると、いつしか反対の意味になってしまっていることである。自然とは物事のあるがままの姿、なるがままの姿であって、自然に従うとは、理性と秩序の抑制を離れて、自発的な感情を奔放に発揮することになった。（p.46－7）

古代ギリシアに憧れる古典派の時代は、１８世紀啓蒙思想の時代である。理性尊重の時代である。１７世紀の科学革命を経て、自然の法則の探究の時代であった。ここで、自然は理性であり、秩序であり、法則であった。自然を機械と見る見方も生まれた。そして「文明（Civilization）」という言葉も生まれた。都会と田舎が区別され、野蛮に理性の光をあて啓蒙していかなければならない。そしてその時代は、産業革命の時代であった。

自然に叡智を見る見方は、自然の理性、自然の秩序、自然の法則を見る見方である。その考え方は、古典主義の考え方であり、古代ギリシアの考え方である。今日、科学技術の訳語を与えるテクノロジー（technology）の語源は、ギリシア語のテクノロギア(technologia)である。テクノロギアは、テクネー(techne)とロゴス(logos)からなる。テクネーは、「技術」の意味で、もともとは「家を建てる技」の意味であった。ロゴスは、「言葉」や「論理」、「計算」そして「世界を貫く理法」などの意味で使われた。古代ギリシアでは、「言葉」や「詩作の技術」と関係して使われたため、テクノロギアは、「文法」の意味で使われる一方、「ロゴスを備えた製作能力」の意味で使われた。それが今日に及び、テクノロジーの語源となったと考えられる。

古代ギリシアの技術思想は、プラトンとアリストテレスによるが、根本には、ロゴス＝理性をもつ人間の能力がある。プラトンは、「寝椅子の製作者は寝椅子の実相（イデア）に目を向けて作る」（『国家』第１０巻）という。寝椅子の製作者即ち技術者は、勘やコツ、経験や熟練などに頼らず、寝椅子の本来の姿（イデア）を見抜き、理性的に対応して、計算に基づき、理論的な説明ができるような形で製作する。人間は、生まれながらに「技術者としての人間」（ホモ・ファーベル）とプラトンがいう技術者とは、すべてに優先する魂＝理性をもち、イデアの世界を観想する「理性を持つ動物」としての人間である。それは、今日の科学技術者と変わらない。アリストテレスも基本的には同一の立場に立つが、アリストテレスは、「技術は、一方では、自然がなしとげられないところの物事を完成させ、他方では、自然のなすところを模倣する」（『自然学』第二巻）という。プラトンは、自然よりも魂が優先し、技術が優先した。プラトンは、個々の事物を越えたイデアの世界を真の世界とした。一方、アリストテレスは個々の事物こそ真の存在と考えた。自然に存在するものと技術を相補的なものと考えたのである。自然には秩序があった。アリストテレスの自然界は秩序と調和のある世界であった。それは中世においても引き継がれた。

それに根本的な疑いを呈したのがガリレオらで、科学革命をおこすことになる。そこで、重要な働きをなしたのが、技術である。職人の技術である。プラトンやアリストテレスは哲学者として、理性の行使としての技術を評価したが、生産には従事せず、製作者でもなかった。かれらによって哲学と製作、生産は分離した。機械的な技術は寺院関係で伝達された。ルネサンス以来、科学的観察・思考の発展とともに、高等職人が輩出し、機械的発明も行なわれた。アリストテレスの自然を打ち破ったのが、ガリレオであり、その天体望遠鏡であり、科学技術であった。ニュートンも哲学者としては行なうべきでない職人の仕事に手を染め、実験を行い、実験によって法則を発見した。科学革命の成立である。それが現代に至る。現代は、科学技術の時代であり、技術の文明である。それは、人間中心の思想である。理性をもつ人間がその中心にいる。自然の叡智とは、理性の叡智であった。

自分で呼吸できない人に与えられた呼吸器は、自然の叡智をもつ人間の幸福な科学技術の産物である。その一方、医療機器の発達による過度な延命器具の行使による延命操作への批判もある。愛知万博のテーマである自然の叡智とは西欧の人間中心思想とは違ったものである。

５．日本の自然の叡智とものづくり

日本文学と比較文学を研究する中西進氏が、『日本語ふしぎ』で、次のように述べている。

古代人には、「人」と「自然」を相対化してとらえる意識がなかったのではないでしょうか。人も自然もひっくるめて、ここにある山、あそこにある川、そして私、そういうものを、総体としてとらえていたのではないでしょうか。

そのような森羅万象を、私は「もの」と名付けたのではないかと思うのです。（p.171）

西欧のネイチャーという言葉に相当するものとして「自然」を使用するようになったのは、明治以降のことで、それ以前に山川草木全体を指す言葉はなかったのかという、自らの問いに対する中西氏の答えである。「自然」は、明治以前は、「おのずから」という意味で使わ

れていた。明治以前にネイチャーに相当するものとして使われたのが、「もの」ではないか、と言う。しかしその場合でも、人と「もの」とは対立的ではなく、「もの」は「人」も含む全体である。これは、今までに見てきた西欧思想と根本的に異なる考え方である。西欧では、人間が中心にいた。

西欧では、人と自然は対立する。プラトンは、理性をもつ動物としての人間を最優先に考えた。自然を支配するのが人間である。自然を支配して、人間はcultureやcivilizationを築いた。日本人は、それらに「文化」と「文明」という訳語を与えた。大正時代には、文化は「精神文化」、そして文明は「物質文明」の意味で受け入れられた。そこには、ドイツ語の「クルトゥ―ルKultur」の影響があった。哲学者カントは、「クルトゥ―ルについて、人間の精神が自然を克服して高められていく、という意味で使っている。これはフランス語のculture、さらにラテン語のculturaで、人間の個人の精神をつくるという意味で使われていたのを受け継いだ用法であった。カントが理解したクルトゥ―ルが『自然』(Natur)に対立するという意味のとらえ方も、ラテン語でcolereが『耕す』という意味であったのを受け継いでいる」（p.59）と、柳父章は『一語の辞典　文化』で、解説している。

自然と対立し、自然を耕して、文化を育てていく。言い換えれば、自然を支配することである。その結果、自然破壊となった。環境をテーマとする万博を迎えた今、その枠組みを変える時期に来ている。また文化と文明の区別、精神文化と物質文明の区別も一考する必要があるように思われる。精神と文化の対立は、自然と文化の対立の延長上にあるように思える。精神と物質が混交するような視点がないものであろうか。日本人の「もの」の思想やアニミズムには、その視点を生む可能性はないのであろうか。

『名古屋十話』に掲載された、豊田章一郎氏の「モノづくり・人づくり・国づくり」という文章にある「文化としてのものづくり」という言葉と「人を育てるものづくり」という言葉に、その可能性が見られるのではないかと思われる。ものづくりは、従来、文明とされ、文化とされなかった。物質と精神の二元的な見方からである。もともと、日本人にとって、すべてが「もの」であった。人間も含めて「もの」であった。その思想はわれわれの根底にある。その根底の思想を今一度確認し、それを土台として、個々のものを区別し、見るということが必要なのではないか。「もの」に「いのちを」見るのが日本人である。想像力により「いのち」をこめるのが日本人である。そのアニミズムが、ものの再生や再利用を考え、循環型の社会を築くために必要とされる。

「人づくりとしてのものづくり」という言葉は、「木に学べ」という薬師寺宮大工棟梁の西岡常一氏を思い出させる。プラトン以来、西欧では人がものを作ってきた。ここでは、ものが人を作るのである。この相互作用が大切である。西岡棟梁は、『木に学べ』で「自然と共に生きているというのでなければ、文化とはいえませんな」（p.106）ともいう。また梅棹忠夫氏の『文明学の構築のために』における「文明というものを、自然の延長上においてとらえている」という見方も、自然と文明を連続的に見る見方であり、今、必要とされている思想である。

6．おわりに

照川氏は、「闘病」という言葉を嫌った。進行性の、どうしようもない「病気に闘いを挑んで、勝つというのは、何を指しているのだろうか？」（p.20）と自問した氏は、「闘病」という言葉に疑問をもち、嫌になったという。そして見出したのが、お遍路の「同行二人」という言葉から思いついた「病とみちづれ」という言葉であった。病気と闘うのでなく、友だち関係でいるのである。この思いによって、照川氏は、病気を無理なく受け入れることができ、落ち着きを得た。

「闘い」という言葉は、対立思想を思い出させる。自然と人間の対立。その行き着いた果てが、環境破壊であった。自然と友達関係になる。相互尊重での交流、相互作用の関係になることである。万博が一つの理想として掲げた「里山」は、自然と人間の交流の場である。

人間のつくる文化とは、畢竟、人間性の発露である。人間の文化の姿は、それを作り出した人間の姿である。照川氏の人間性はどのようか。奥さんは、照川氏の介護をしようと決意したのは、照川氏が難病ゆえに死を選ぼうとするのは「周りの者に迷惑をかけるという気持ちからだったことを知り、私は覚悟を決めた。」（p.160）という。また次のように言う。

> 人間には宿命と寿命があるというが、夫を見ていると、その人の生き方によって、宿命も寿命も決まると思うようになった。たとえば、夫が今まで生きてきた過程で、周りを困らせるような人であったなら、発病後まもなく寿命は終わっていたであろう。しかし、本人の前向きな強い意志をもった生き方により、たくさんの方がつねに枕許に来てくださり、充実した毎日を送ることができているからである。（p.160－1）

宿命と寿命というものは、人間の思うようにならない自然の営みである。それが、人間の方に主導権が移っているという。自然に勝とうとしたのではない。自然は「みちづれ」であった。共生である。ここまで述べてきた西欧的な対決思想、力の、支配闘争の考え方でなく、相互受容の精神が、能動的な結果をもたらしているといえよう。「周りのものに迷惑をかけない」という倫理的な思いが、弱い、自力呼吸もできない人間を生かせているのである。「病とみちづれ」であり、「自然とみちづれ」である照川氏の人間性が、可能にしているのである。

参考文献

照川貞喜，泣いて暮らすのも一生　笑って暮らすのも一生，岩波書店，2004.
濱井修（監修），倫理用語集，山川出版社，2003.
星野勉　三島輝夫　関根清三（編），倫理思想辞典，山川出版社，1997.
中村雄二郎，共通感覚論，岩波書店，1984.
中村雄二郎，感性の覚醒，岩波書店，1984.
内田伸子，想像力　創造の泉をさぐる，講談社，1994.
大島一彦，ジェイン・オースティン　「世界一平凡な大作家」の肖像,中央公論，1997.
中西進，日本語のふしぎ，小学館，2003.
柳父章，一語の辞典　文化，三省堂，1995.
西岡常一，木に学べ　法隆寺・薬師寺の美，小学館，1996.
梅棹忠夫，文明学の構築のために，中央公論社，1981.
豊田章一郎，モノづくり・人づくり・国づくり，中日新聞社（編），名古屋十話，中日新聞社，2002所収.

（受理　平成１７年３月１７日）